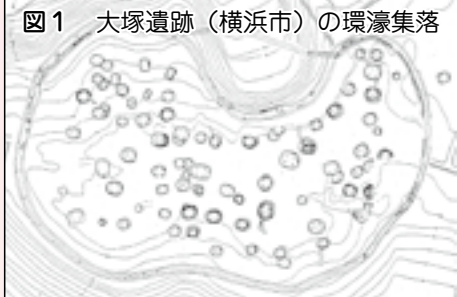


図1 大塚遺跡（横浜市）の環濠集落



弥生時代の集落は、楕円形や不整形に巡らされた濠に取り囲まれていることを通有とします。集落が全掘された稀なものとして、図1に横浜市の大塚遺跡例を掲げておきましたが、こうした弥生時代の環濠集落は、水稻農耕技術をもたらし渡来者集団の故郷の集落造成技術であり、中国の春秋戦国時代（紀元前770年～）以来の城郭都市が変形した姿とみられています。つまり居住域としての環濠内部と、墓地や水田域としての環濠外部の使い分けが明確になされているのが

ふるさと御所 文化財探訪

其の六

弥生時代〈2〉
環濠集落と
弥生人の住まい

生涯学習課文化財係
☎内線696

図2 鴨都波遺跡の大溝（第11次調査）



弥生集落の特徴と言えます。

鴨都波遺跡は地形上の制約から集落を完周する環濠こそ持っていないませんが、第11次調査（三室）では、集落の南端を画する幅3.9m、深さ2.5m以上の大溝（図2）が見つかっています。こうした環濠や大溝は、弥生社会が戦闘状態に備える防衛集落を必要としたことを示しています。

環濠内部の弥生人の住まいは竪穴式住居（図3）と言われるものです。直径6～12m程度の堅穴を掘り、周壁溝に杭を打って板材を固定することにより壁とし、雨水が進入しないように周堤を巡らせま。屋内には通常2本ないし4本の柱を埋め込み、桁材を渡し、桁の上に束を立てて支えた棟木に垂木

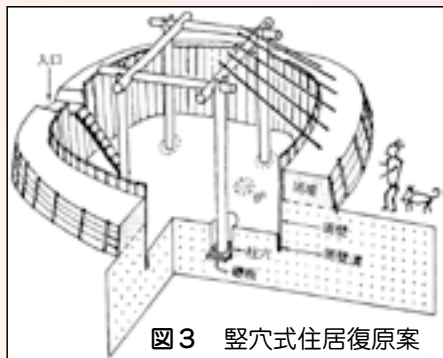


図3 竪穴式住居復原案

図4 鴨都波遺跡の竪穴式住居（第11次調査）



図5 井戸の祭り（第11次調査）



【転載許可】

- 図1 財団法人ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター『調査研究集録1』、1976年 から転載許可（横歴埋第104号）。
図3 考古学研究会＝都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻第2号、1975年、考古学研究会 から転載許可。

めに不可欠の炉が設けられます。このような竪穴式住居は、鴨都波遺跡でも多数見つかっています（図4）。
集落には住居のほか、田畑で収穫した稲や作物を保管するための高床式倉庫、敵の接近をいち早く発見するための望楼（見張り台）、各種工房、井戸などが設けられます。井戸を廃絶するに際しては、その底に土器が納められています（図5）。おそらく土器の中には米や酒などが入れられ、水の神様に感謝し、新たに掘削する井戸に清水が充ちるよう祈りが捧げられたのでしょう。近現代にも通じるこのような風習は、2500年以上前の弥生時代に起源を持っています。

編集後記

北アルプスの上高地から蝶ヶ岳に登ってきました。初日は猛烈な雨で、真っ白いガスの世界でしたが、翌日は晴れ渡り、期待していた槍・穂高連峰の大パノラマが視界いっぱいになり、長い縦走路の道中、目を楽しませてくれました。（久）



2008.